

オーガスト・ウィルソンの『フェンス』

—アメリカ家族劇の継承と反証—

落合 貞夫

日本大学大学院総合社会情報研究科

August Wilson's *Fences*

—Continuation and Revision of the American Family Drama—

OCHIAI Sadao

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

August Wilson's *Fences* is an American family drama that depicts a father and son conflict, marital discord, and the disintegration of family. Troy Maxson, the protagonist, has worked hard for many years as a garbage collector in order to support his family, in spite of the discrimination and social injustice in American society. His son and wife gradually give up on him, leaving him in despair and loneliness. When he dies, however, his family reunite and accept his spiritual heritage—"responsibility." However, *Fences* is different from the traditional American family drama in that it teaches the younger generation of African Americans how to survive in white America—by taking responsibility for their family and community.

1. はじめに

オーガスト・ウィルソンの『フェンス』(1985) は、アーサー・ミラーの『セールスマンの死』(1949) に類似している。ともにアメリカの家族劇であって、父と息子の世代間の対立を縦軸とし、夫婦間の裏切りを横軸としている。父の不倫が大きな転換点となり、その葬式の場面で幕を閉じるという基本的な構造も同じである。また登場人物も、アメリカン・ドリームに敗れ、人生の終盤を迎えた初老の男を中心人物とし、フットボールで大学からスカウトされている息子、しっかり者で主人公にとっては申し分の無い妻、長年の無二の親友がいることも共通している。

一方で、本作はミラーに代表される白人のアメリカ家族劇から大きく逸脱している。顕著な相異は、社会に対抗し、闘い続け、家族を守ろうとする父性であり、そのような男性性の承認である。すなわち、きびしい人種差別の社会で如何に生き抜くかを次世代に教え、鍛える父親の役割と責任が強調されているのである。『フェンス』のトロイ・マクソンは、ア

メリカン・ドリームに翻弄され、息子に保険金を残すために自殺する『セールスマンの死』のウィリー・ローマンとは異なる父親である。さらに、夫を否定・拒絶して、母親として生きるローズもウィリーの妻リンダとは大きく異なる。そして、家族だけでなく、若者を守り、育てようというコミュニティの役割の重要性も示されている。

こうした点を検証しつつ、本論では、『フェンス』がアメリカ伝統の家族劇を継承しながらも、これに対する反証としての、アフリカ系アメリカ人の、「もう一つ」のアメリカ家族劇となっていることを論じる。

2. 『フェンス』概説

本作は、ピューリッツァー賞、トニー賞、ニューヨーク劇評家協会賞を受賞したウィルソンの代表作である。黒人演劇と言うよりも、より普遍的な家族の物語として評価されたことが、ジャーナリスト Bill Moyers の、次のような感慨に表れている。

I wasn't an outsider, even though it was about the black experience in America. I wept at the relationship between the father and the son, at the mother who was so loyal to a disloyal husband, at the importance of tradition, the role of the community. I wept. I was not an outsider there. (qtd. in Wang 61-62)

20 世紀サイクルの中では 1950 年代を取り上げており、より厳密には公民権運動初期の 1957 年が背景となっている。この年、マーチン・ルーサ・キングを中心に南部キリスト教指導者会議 (SCLC) が結成され、公民権運動が全南部に拡大していこうとしていた。都市名は明らかにされていないが、The Crawford Grill という有名なジャズクラブの名が出てくるので、ピッツバーグ市ヒル地区の黒人居住区であることが分かる。市の清掃局で働くトロイの家の庭が舞台となっている。

2.1. 第一幕

給料日の金曜の夜、53 歳のトロイは同じごみ収集作業員のジム・ボノと酒を飲みながら談笑している。トロイは、ごみ収集の作業は黒人で車の運転は白人という職場の不公平なあり方に不服を申し立てたこと、アルバータというフロリダ出身の女性と最近知り合ったことなどを話す。妻のローズが、息子コーリーが大学のフットボールチームにスカウトされたことを伝えると、元ニグロリーグで強打者であったトロイは、大リーガーになれなかった自身の経験から、たとえ実力があっても白人支配のスポーツ界では黒人選手は冷遇されるだけだと息子の進路に反対する。

トロイがいつものように「死神と闘う話」や「悪魔を見た話」をして楽しんでいると、先妻の子ライオンズが金を借りにやって来る。彼はミュージシャン気取りで、34 歳だが経済的に自立していない。トロイはライオンズが生まれた後、15 年間、刑務所に入っていた。父親として息子のそばにいてやれなかった、その自責の念からいつも金を貸してやっている。

翌朝。ローズは洗濯物を干しながら「フェンス」の歌を口ずさんでいる。トロイの弟ガブリエルが腰

にラッパをぶらさげて登場する。彼は第二次大戦で頭部に損傷を受け、自分を大天使ガブリエルであると信じている。トロイは弟の戦傷補償金 3,000 ドルで自宅を購入したことに罪悪感を持っているが、トロイは精神に障害のある弟の世話を戦後ずっと続けてきたのではないかと、ローズから慰められる。

その日の午後、コーリーがフットボールの練習から帰って来て、父のフェンス工事を手伝っている。コーリーが、大学のスカウト担当者が家にやって来る予定だと告げると、トロイは自動車修理工か大工になれと言い、フットボール奨学生として大学に進学することに反対する。コーリーはなぜ愛してくれないのか、と父に問う。トロイは、「男は家族を養わねばならない」、それは子どもを愛しているからではなく、「自分の責任」だからと答える。父子の会話を聞いていたローズは、スポーツ界で黒人選手が活躍できる時代になって来たことを話し、コーリーにフットボールを続けさせるべきだと擁護するが、トロイは自分の二の舞になって欲しくないと言う。フットボールを続けたいのであれば、アルバイトも続けるようにコーリーに命じる。

二週間後の金曜日。トロイは黒人で初めて運転手に昇格したとローズに報告する。トロイは自分の昇格を一番にコーリーに知らせようとアルバイト先に行っただが、彼はフットボールの練習を優先してアルバイトをやめていたことも、ローズに話す。親にたてつくときは、独り立ちするときだと言って、トロイは自分の生い立ちを語る。彼は南部の貧しい物納小作人の家に生まれ、悪魔のような父のもとで育った。彼は 14 歳のとき家出し、都市の浮浪児となった。家も仕事もない彼は橋の下に住みつき、泥棒となった。妻と子ができた後は、強盗となって家族の生活を支えた。ついに殺人を犯して 15 年間刑務所に入った。そこでボノと知り合い、野球を覚えたのであった。そこに、トロイが大学からのスカウトを断ったことを知ったコーリーが駆け込んできて父親に激怒する。

2.2. 第二幕

翌朝の土曜日。トロイは親友ボノの忠告に従い、愛人アルバータが妊娠したことを妻に告白する。彼

は、緊張した神経をアルバータのアパートで解きほぐすことができた。彼女の部屋でトロイは心の底から笑うことができ、解放感に浸ることができた。一方、妻としてできる限りを尽くしてきたローズは、結婚 18 年目にして夫の裏切りを聞かされ衝撃を受ける。夫婦がもみ合っているところにコーリーが現れ、父の胸にパンチをあげ地面に倒す。トロイが立ち上がると、ローズがしがみついて父子の格闘を引きとめる。

六か月後の午後。ローズはトロイに仕事が終わったらすぐに家へ帰るように頼む。また、彼女は、トロイがガブリエルを精神病院に入れたことを責める。トロイが、ガブリエルの年金の一部を病院へ、残りを自分のものにしようとしているからだ。そこに電話がかかり、アルバータが女の子を生んだ後、死んだと知らされる。死神が近づいて来たと感じたトロイは、フェンスを完成させようと心に決める。

三日後の夜。生まれたばかりの赤ん坊を抱いたトロイが庭先に現れる。彼は、母親を失くした乳児レイネルの養育を手伝ってもらいたいとローズに頼む。彼女は、子どもの世話を受け入れるが、トロイに対しては「女房なしの男」になるのだと宣告する。

二か月後の金曜日。ライオンズが借金を返しに来る。ローズは教会のバザーに出かける。コーリーは高校を卒業して仕事を探している。久しぶりにボノがトロイを訪ねて来て、お互いに近況を語り合う。運転手となったトロイは話し相手もなく、退職を考えている。ボノも体力の限界から引退しようと思っている。トロイが玄関に座って「愛犬ブルー」を歌っていると、コーリーが父をまたいで通ろうとする。無礼なコーリーに対してトロイは怒り、家から出て行けと命じる。コーリーはバットで父をなぐろうとするが、父にバットを取り上げられ、フェンスの外に追放されてしまう。トロイは勝負の準備はできたからいつでも来いと死神に挑戦する。

八年後の 1965 年。海兵隊の伍長となったコーリーが帰省する。トロイの葬儀のためである。レイネルはすでに 7 歳になっている。ライオンズは軽犯罪者の矯正施設に入所中だが、父の葬儀のために一時帰宅が許可され、トロイの腹違いの三人の子は 8 年ぶりに再会する。トロイが二階の部屋をコーリーの部

屋と呼んでいたこと、その部屋の押し入れには今もフットボールが置いてあること、海兵隊で伍長に昇任したことを誰よりも喜んでいたことをコーリーは知らされる。しかし、彼は父の葬儀に出席したくないとローズに打ち明ける。ローズは、生前のトロイが、コーリーに自分とは正反対の者になること願っていた、トロイのしたことは間違っていたかも知れないが、息子の幸福を願ったことであり、悪気はなかったのだと諭す。コーリーは「愛犬ブルー」をレイネルといっしょに歌ううちに、父の深い愛と苦闘の人生を思い起こして葬儀への出席を決心する。

そこに精神病院からガブリエルが葬儀のために一時帰宅してくる。彼は、聖ペテロが天国の門を開くよう、トランペットを吹く。しかし、マウスピースがないので音が出ない。そこで彼は、奇妙で不気味な、先祖がえりのような踊りを始める。その踊りが終わると、天国の門が開き、トロイは家族に祝福されて昇天する。

3. もう一つのアメリカの家族—アフリカ系アメリカ人家族像の創出

3.1. 黒人男性像の改訂

ウィルソンは『フェンス』執筆の動機について次のように述べている。

I know there are not strong black images in literature and film, so I thought, why not create them? . . . Troy Maxson is responsible. Those images are important. Every black man did not just make a baby and run off. (qtd. in Bogumil 42)

家族を棄てる無責任な黒人男性像はボノによって次のように語られる。“Searching out the New Land. That’s what the old folks used to call it. See a fellow moving around from place to place . . . woman to woman . . . called it Searching out the New Land.” (48) これが当時の黒人男性のステレオタイプであった。ボノは家から蒸発して勝手な生活を送る黒人男性を the walking blues (49) とも呼んでいる。しかし、トロイが示す男性像はまったく逆のものである。

トロイはかつて殺人を犯した前科者で、出所した

ときはすでに 30 代半ばになっていたが、刑務所で覚えた野球を続け、ニグロリーグに入った。ニグロリーグでは、打率四割三分二厘、ホームラン 37 本を打つ強打者となった。史上最速の投手サ切尔・ペイジから 7 本ものホームランを打ったことを何よりの自慢にしている。試合後には握手を求めて 200 人ものファンが押し寄せるスター選手であったが、人種差別のため、メジャーリーグに入って活躍する道は閉ざされていた。

ローズと結婚してからは、市の清掃局でゴミ収集の作業員となって働いた。字が読めず、前科のある彼には他に仕事がなかった。給料はすべて妻に渡し、酒を飲むのは金曜日だけと決め、ナンバーズ（数当て賭博）もしなかった。こうした堅実な生活は家族に対する責任感からであったが、毎日白人に我慢しながら働いている彼の内心は愉快でなかった。ニグロリーグで大活躍した男としては屈辱的な生活である。ゴミ収集の仕事で彼の実力が思う存分発揮されることはないし、将来に夢がある生活でもない。家族への責任の重圧とつましい生活を 18 年間も続けているうちに、彼は息抜きを必要とするようになった。そんな心境を彼は、“I done locked myself into a pattern trying to take care of you all that I forgot about myself.” (66) と述懐する。ついにアルバータという女と浮気をして、子どもを作ってしまう。

トロイの最高規範は、家族に対する責任である。この価値観は、父から受け継いだものである。父には 11 人の子どもがいたが、家族を見捨てることはなかった。物納小作人として家族のために必死で働いた。奴隷制度から解放されても、家も土地もない黒人奴隷の子息はそのまま白人が経営する農場に留まり、小作人として働くほかに生きる道はなかった。土地、農具、住居などを借りているので、いくら働いても借金が残るシステムで、新たな形態の奴隷制度であった。(上杉 62) どんなに働いても借金が減ることはなかったが、父は決して責任から逃げようとはしなかった。父は暴君で、トロイの母は彼が 8 歳のとき家出し、再び帰って来ることはなかった。父の家父長的横暴さは、そのままトロイに引き継がれている。

家父長としての強い権限を裏付けるものは、経済

力と社会的権力であるが、白人社会のなかで黒人男性が両方とも手にはすることは難しい。したがって黒人家庭における父権と、白人家庭の父権を同等に見るわけにはいかない。そもそも奴隷制のなかで黒人男性に父権はなかったのであり、奴隷解放後も強固な父権社会を構築する条件はなかった。黒人家庭における家父長制は、あくまで白人男性優位の社会制度の反映として見る必要がある。

なお、トロイのモデルとなったのは、ウィルソンの継父デイヴィッド・ベッドフォード (David Bedford) である。(Shannon 92) ベッドフォードは高校のフットボールのスター選手で、奨学金を得て大学で医学の道を目指していた。しかし、奨学金提供の申し出がなかったため、金を得るため店に押し入り、誤って人を殺し、23 年間刑務所で暮らした。出所後、ウィルソンの母と知り合い結婚し、市の下水道局で清掃作業員として働いた。ベッドフォードは 1958 年から 1969 年までウィルソンの継父であった。ウィルソンが 13 歳から 24 歳までの時期であり、二人の関係は不和であった。ベッドフォードがウィルソンのことを心から気にかけていたことを知ったのは、継父の死後であった。トロイは 53 歳に設定されているが、ベッドフォードが死去した年齢も 50 歳代前半で、ほぼ同年齢となっている。ウィルソンもコーリーと同じように学校ではフットボールチームに所属していた。このような共通点から、『フェンス』はサイクル劇の中でも最も自伝的な作品であると言える。

トロイは、言うまでもなく、古代ギリシャの都市名であり、ホメロスの口承によって、後世に名を残してきた。トロイの長い「語り」はホメロスの叙事詩のような力強さがあり、古代ギリシャの英雄たちとトロイの誇り高い生き方には響き合うものがある。彼は父と同じようにひたむきに働き一家の大黒柱としての責任を果たした。それは、家族を棄てる黒人男性のステレオタイプ・イメージを逆転させている。

一方で、身勝手に横暴な家父長の性格も引き継いで、これが原因となって家庭を崩壊させてしまう。浮気をして妻から見捨てられ、息子も家を去る。こうした欠陥を持ちながらも、トロイは観客の深い共感を呼ぶ人物である。それは彼がその時代と社会の

犠牲者であるにもかかわらず、不屈にひたすら家族への責任を果たそうとしたからである。彼は次のように苦しい労働の日々を語る。

Woman . . . I do the best I can do. I come in here every Friday. I carry a sack of potatoes and a bucket of lard. You all line up at the door with your hands out. I give you the lint from my pockets. I give you my sweat and my blood. I ain't no tears. I done spent them. (40)

トロイの父は、南部の極貧の物納小作人であった。1904 年生まれのトロイは都市に出てゴミ収集の賃金労働者となった。トロイの息子コーリーは高校卒業後、海兵隊に入り伍長に昇任している。この半世紀に渡る三世代を見る限り、黒人男性の状況は社会的にも経済的にも向上したとってよい。コーリーの時代は、大学への進学が可能になり、プロのスポーツ選手への道も切り開かれた。しかし、コーリーの将来は決して明るいものではない。

コーリーは海兵隊に入り、伍長になった。ライオンズもローズもその姿を見て喜ぶ。死んだトロイも昇任した息子を自慢にしていた。しかし、ライオンズから“you gonna stay in . . . make in a career . . . put in your twenty years?”(85) と聞かれたコーリーは、“I don't know. I put in six years. That's enough.”(85)と答えている。仕事のない黒人青年にとって軍隊はひとつの選択肢であったが、敗北者の道であった。生活が保障され、人生を切り開いていく必要はなくなるが、軍隊から出ても職を見つけることは難しい。ウィルソンは、コーリーの将来について次のように予測している。

Then they get out of the army and find there's nothing to do. They didn't learn any skills. And if they did, they can't find a job. Four months later, they're shooting dope. (Sarvan 33)

最初の結婚で生まれたトロイの息子ライオンズはミュージシャンを目指しているが、34 歳になっても経済的に自立できず、毎週のように父の給料日に金を借りに来る。ライオンズが生まれて 15 年間刑務所

にいたトロイは、彼の言いなりになることでその償いをしようと思っている。ただし、ライオンズは借りた金をきちんと返済しており、決して無責任な人間ではない。彼は、有名な the Crawford Grill で演奏するほどになっているので、夢を実現する力があるといってよい。今は他人の小切手を現金化した罪で服役中であるが、軽犯罪者の矯正施設でバンドを結成し、出所後は一人前のミュージシャンとして生きて行こうと決心している。

トロイは家族全員に祝福されて昇天するが、この結末に、ライオンズもコーリーも父の苦闘の人生を思い起こし、父の精神的遺産である「責任」を引き継いで生きて行くことが示唆されている。黒人男性像の改訂があり、その次世代への継承の儀式が遂行されたということでもある。

3.2. 黒人女性像の改訂—妻ローズの覚醒

ウィルソンのサイクル劇においては、登場人物は圧倒的に男性が多い。一方で、ウィルソンは『マ・レイニーのブラック・ボトム』(1982) のマ・レイニーのような卓越した強い女性、また、エスターおばさんのようなシャーマンの呪術的力を持つ女性を登場させている。トロイの妻ローズ・マクソンも、家父長的黒人家庭の犠牲者、抑圧される妻から覚醒し、これら強い女たちの系譜に連なる存在へと変容を遂げていく。

この劇における最大のメタファーであるフェンスを作るのを思い立つのは、妻ローズである。ローズの願いは家庭を守ること、そのためのフェンスであった。彼女は、“Jesus, be a fence all around me every day / Jesus, I want you to protect me as I travel on my way.” (25) と歌う。彼女の兄弟姉妹たちは父親や母親が別々であった。彼女はこうした家族だけは絶対に作りたくなかった。ローズがトロイにフェンスを作るように言ったのは、トロイが浮気を始める時期と一致している。彼女は本能的に家庭の崩壊を防ぐためにフェンスを作ることを思い立ったのだ。トロイもコーリーも、彼女がフェンスを作ろうとする目的が分からないのだが、ボノは彼女の心情を代弁して次のように言う。“Some people build fences to keep people out . . . and other people build fences to keep

people in. Rose wants to hold on to you all. She loves you.” (59)

家父長トロイはローズを対等なパートナーとして見ていない。(Wolfe 63)

ROSE: What you all out here getting into?

TROY: What you worried about what we getting into for? This is men talk, woman. (12)

また、トロイの次の言葉も、彼がローズを単に家庭の主婦として、また性的欲望を満足させる存在として見ていることを示している。

Well, go on back in the house and let me and Bono finish what we was talking about. This is men talk. I got some talk for you later. You know what kind of talk I mean. You go on and powder it up. (13)

トロイからアルバータとの不倫を聞かされたとき、18年の結婚生活は砕かれた。彼女は激怒し、抗議するが、すぐに妻の立場を捨てるわけではない。トロイも愛人との関係を清算しようとはしない。夫が愛人との関係を続けていても、ローズは離婚することなく、同居生活を続けている。浮気を知ってから半年後、彼女はトロイに仕事が終わったらはやく帰宅して欲しいと頼んでいる。アルバータが死んだときも、“I am your wife. Don’t push me away.” (72) と妻としての立場を主張している。

女性としてのローズに用意されていた人生は、男性への従属と自己の喪失であった。彼女は迷うことなくその道を選択した。ほかに生きる道を知らなかったからである。しかし、夫の浮気が触媒となって、彼女の意識は徐々に変化していく。たとえば第一幕で、ガブリエルの戦傷補償金で家を購入したことに罪悪感を抱いているトロイを彼女はなぐさめる。金銭の管理ができない弟のために正しい選択をしたのだとやさしく夫をかばうのである。しかし、夫の裏切りを知った後の第二幕では、弟を精神病院に入院させ、軍人恩給の一部を自分のものにしようとしたトロイを責める。彼女は、夫の行為を批判できるよ

うになるのである。

トロイの「責任」は、住居、食事、衣服を与えるという経済的な義務に重点が置かれている。トロイの信念は次の言葉に集約されているとあってよい。“It’s my job. It’s my responsibility! You understand that? A man got to take care of his family.” (39) 彼は家族に対する責任を果たしているので、自分が家の外で何をしようが勝手だと思い込んでいる。家族への責任を果たすことが自己充足となっているのである。自分の行為がいかに家族を傷つけるものか深く察することができない。その証拠に、トロイは生後間もない赤ん坊を抱いて次のように語りかけるのである。“A man’s got to do what’s right for him. I ain’t sorry for nothing I done. It felt right in my heart.” (73)

愛人のアルバータが死んで、夫との関係を回復できると思っていたローズは、この言葉を聞いて、“From right now . . . this child got a mother. But you a womanless man.” (74) と夫婦関係の終焉を宣告する。この場面で黒人女性観客から拍手が起きたと言われる。(Elam 179) ローズは夫に従属した関係を断ち切り、独立する。トロイは家庭での力を失う。次は第二幕第四場の場面での夫婦の対話であるが、トロイとローズの立場が逆転している。

TROY: What time you coming back?

ROSE: Ain’t no use in you studying me. It don’t matter what time I come back. (75)

彼女にもトロイと同じように自己充足の欲求があった。しかし、家父長制の下では抑制すべきものであった。彼女の心の充足は、レイネルの養育と教会へと向かうようになる。

. . . but I took on to Raynell like she was all them babies I had wanted and never had. (*The phone rings*) Like I’d been blessed to relive a part of my life. And if the Lord see fit to keep up my strength . . . I’m gonna do her just like your daddy did you . . . I’m gonna give her the best of what’s in me. (89)

自分の最善のものを子どもに与えるという彼女の

子育ては、夫のトロイから学んだものである。彼女はトロイの「責任」をそのように理解し、実践しようとしている。ローズも息子たちと同じように、トロイの精神的遺産の継承者となるのである。

これに対して黒人女性フェミニストのベル・フックスは、ローズが夫の罪を許したことによって家父長制が批判的に描かれていないとして次のように述べている。

Fences poignantly portrays complex and negative contradictions within black masculinity in a white supremacist context. However, patriarchy is not critiqued, and even though tragic expressions of conventional masculinity are evoked, sexist values are re-inscribed via the black woman's redemption message as the play ends. (qtd. in Elam 180)

しかし、ローズは自分の半生を振り返り、家父長制の下で生きてきたことを自責を込めて確認するのである。彼女は最後の場面でコーリーに次のように語っている。

That was my first mistake. Not to make him leave some room for me, for my part in the matter. But at the time I wanted that. I wanted a house that I could sing in. And that's what your daddy gave me. I didn't know to keep his strength I had to give up little pieces of mine. I did that. I took on his life as mine and mixed up the pieces so that you couldn't hardly tell which was which anymore. It was my choice. It was my life and I didn't have to live it like that. But that's what life offered me in the way of being a woman and I took it. (88-89)

夫に裏切られたローズは熱心なキリスト教徒になり、トロイの罪を赦し、残された人生を愛人の産んだ子レイネルの養育に捧げようと決める。50年代後半の公民権運動の胎動とともに、ローズは男性に従属した生き方から離脱を遂げていく。黒人女性の二重の隷属からの自己解放である。

ローズは、また、夫よりも時代の変化に機敏であ

る。メジャーリーグの全球団で黒人選手の入団を認めるのは1959年、NFL (National Football League) の全チームで黒人選手がプレーするのは1962年のことで(川島 159)、プロスポーツ界における人種の壁は打破されつつあったのであり、彼女は夫に、“The world's changing around you and you can't even see it.” (40) と諭している。また、息子コーリーの内面もよく観察しており、“He's just trying to be like you with the sports.” (39) と若き日の父を見習っているのだとトロイに教えている。

ウィルソンは『フェンス』によって黒人男性像を改訂することを当初の目的とした。それは、「責任」という最高規範に忠実に生きた男を描くことで果たされた。同時に、家父長的男性への従属から目覚めていく新しい黒人女性像も創り上げることになった。ウィルソン劇における、この強い女は『マ・レイニーのブラック・ボトム』のマ・レイニーに遡ることができる。ブルース歌手の彼女は、白人資本のレコード会社を打ち負かす女傑であった。『フェンス』のローズ以降、『二本の列車が走っている』(1990)における男性を寄せ付けないリサ、『キング・ヘドリー二世』(1999)の息子を撃ち殺すルビー、『大洋の宝石』(2003)のシャーマン、エスターおばさんへと続き、根本的に問題の多い黒人の男性性に対して、重要な系譜をなしていく。同時に、「もう一つの」黒人家族、「もう一つの」黒人コミュニティの在り様を示すものとなっている。

4. まとめ

『フェンス』はアメリカ演劇のリアリズム家族劇に立脚し、父と子の対立、夫婦間の裏切り、アメリカン・ドリーム、家庭の崩壊などが描かれ、また罪—受苦—浄化という悲劇の三要素で構成されている。

ただし、ウィルソン劇においては、いかに生き延びていくかが彼らの差し迫った課題である。親たちは、厳しい人種差別の社会を生きて行くための心構えを子どもたちに伝授しなければならない。『フェンス』においては、この父親の役割と責任が重要なテーマとなっており、この点が従来のアメリカ家族劇と大きく相違するところである。

ウィルソン劇においては、夫婦や父子が対立した

ままで終わるのではなく、父の愛を確認し、その罪を赦し、和解し、その人生を讃えるのである。このようにして父から次世代へと精神的遺産が引き継がれるのである。トロイが息子に教えたのは、生き延びるための強さだけでなく、家族に対する「責任」であった。トロイも父からそれを学んだのである。

また、夫の裏切りで夫婦関係は破綻するが、妻ローズはその破綻を乗り越えて愛人が産んだ子を育てようとする。彼女は、自分の最善のものを子に与えるという育て方をトロイから学んだという。ウィルソンはアフリカ系アメリカ人の家族の物語を創るにあたって、父性から母性に重心をシフトさせたと考えられよう。これまでのアメリカ家族劇が絶望と孤独で幕を閉じるのとは異なり、7 歳になったレイネルは家族の希望の星になっている。次世代を育てる家族やコミュニティの役割の重要性を示すこの劇は、アメリカ家族劇の伝統を継承しつつ、進化させる作品になったと言えよう。

参考資料

- Bogumil, Mary L. *Understanding August Wilson*. Columbia: U of South Carolina P, 2011.
- Devries, Hillary. "A Song in Search of Itself." *American Theater*, January 1987, 25
- Herrington, Joan A. *I Ain't Sorry for Nothin' I Done: August Wilson's Process of Playwriting*. New York: Limelight, 1998.
- Elam, Harry J. Jr. "August Wilson's Women." *May All Your Fences Have Gates: Essays on the Drama of August Wilson*. ed. Alan Nadel. Iowa City: U of Iowa P, 1994
- Green, Tara T. "Speaking of Voice and August Wilson's Women." *August Wilson and Black Aesthetics*. ed. Dana A. Williams and Sandra G. Shannon. New York: Palgrave Macmillan, 2004.
- Savran, David. "August Wilson." *Conversation with August Wilson*. ed. Jackson R. Bryer and Mary C. Hartig. Jackson, MS: UP of Mississippi, 2006.
- Shannon, Sandra G. *The Dramatic Vision of August*

- Wilson. Washington, D.C.: Howard UP, 1995.
- Shannon, Sandra G. and Williams, Dana A. eds. *August Wilson and Black Aesthetics*. New York: Palgrave Macmillan, 2004.
- Wang, Qun. *An In-Depth Study of the Major Plays of African American Playwright August Wilson: Vernacularizing the Blues on Stage*. New York: Edwin Mellen, 1999.
- Weinert-Kendt, Rob. "The Great-Color Consciousness Raiser." *American Theater*, July/August, 2016. 30 Sept. 2016 <<http://www.americantheatre.org/2016/06/20/the-great-color-consciousness-raiser/>>
- Wilson, August. *Fences*. New York: TCG, 2007.
- Wilson, August. "The Ground on Which I Stand." *American Theater*, July/August. 2016. 30 Sept. 2016 <<http://www.americantheatre.org/2016/06/20/the-ground-on-which-i-stand/>>
- Wolfe, Peter. *August Wilson*. New York: Twayne, 1999.
- ウィルソン、オーガスト 『フェンス』 桑原文子 訳 而立書房 1997
- 上杉 忍 『アメリカ黒人の歴史』 中公新書 2013
- 川島浩平 『人種とスポーツ』 中公新書 2012
- ドーシー、ジョン 「August Wilson の 20 世紀サイクルーアメリカ演劇においても "Black Lives Matter"」 (日本アメリカ文学会東京支部 6 月例会シンポジウム「21 世紀から見るアメリカ演劇の 100 年—エスニシティ・家族・社会の変遷—」 慶應義塾大学三田キャンパス、2016 年 6 月 25 日)

(Received: September 30, 2016)

(Issued in internet Edition: November 1, 2016)